

911.3
人信

滑稽

張羅集

信

滑稽

張羅集

信





滑稽銘錄集卷之五

尾陽沙門 馬州 撰

伊賀

上野

山鶴瓦葺くあんぞ

芭蕉翁

寶性寺記

其水

伊陽を元本村賓煙ちよき金算れあり
一里計と追さぬ聲大内水の邊にすりおと

精舍を一院あつて山に廻り
川と抱く神風の伊勢山より小糸写く
舊都乃通し遊くうきしがア
修くまつて諱馬の流れも止じられ
僅き少しひく西京のかなあ文化の目立
格も二流よ曉とはすくまつたるの
と華やかに達した東中袖よがまと
圓はん水本堂まひて西限者
うきしがア

年次春之奇游

其水
其水
其水

一刻庵

在ての事追々トテセシ事
主のもの無れ候徳久早苗
此身の火を拂はれ一之巣穴
主の火を拂はれノハシの月
日益もやがて解て病のむ

色をうれじ楊まくや初こくら 其水
アシマニ鬼トヒサヘアハ帰ミテ
シヒトハ通輪ヨリゲテ水のまき

百韻首尾

其水獨吟

鱗乃塊干はすれ沙子テ汝
ルニ湯乳とる乃輝
火ノ木と有成齋北緯府ふ
行ヤツツモ代北枕
ゆきのからぬふくらむ月れ照

心の限フシル水のミ
唐衣か写すが風乃沙
柔よとゆて立身
士姑難の朝よに連れ花落
年子くよきしもまた
恰めのまがよきてそのせ男
ぬもやづけのまも刀アレ
が立派で娘とくづく年行峰
あたるまつたる一筆

海を離すはれはまくれにがじて
風を引くとまの水

やまぐらのくよみ小船 何泥

まともも、まくらもと月の士

月乃は月と月の月と月

月はちよはるはる月の月の月

りしめのくやまくと二人に

山や月と浮ゆくぬ乃音

ねの月と風よまくと

月穂のくやまくれれれと 露女

花もまくし一あくと白い郭

セクタやらきどむくのくちがれ

うれ浪のくよくがまれ師とく

白い花もまくしやほる

孤帆

あくまくとまくのくよくあだり

けくわくわくと月と月の月 動荷

形代や姫に移して流との方 動荷

お魚心と月夜は下りて萬葉

多の風の裸りぬれとまくら

内甲船もまくらあらわれ端牛 決水

川を下るまくらとまくら

年や役せせらをひせまく

むすり風のおりまくらや峰 蛙 桂舟

感心乃喜むらさく 云間千

一セドモラクの世や邊は初向聲

移降 ひて日堂乃ニ渡る 成花

蓋板の縁下に吹く風下毛

笠身やと柿子身くわくに移 之手

ぬけて刀アヒテ毛の袖の毛がまく

生枝やみりぬくにかくす

白粉の粉やさくさくと牡丹

まくら達は風にまくら田植され 袖浦

まくらをもまくらてや去月千

風

洞秋

細の月せりあはれ死る因故、うぬ
むか月やどりく迎ち奉れ雲
鳥夜のゆひれどりやこの町
小舟され百味の薑すれを傍
ひとひのむとてのよみがめ
初弓せねれりやさのうに
まゆのまよくと本の年は
ふくよ銀すき落とやえらうと
切れ音り浦を去りて
切れ音り浦を去りて

稍風

新郎とあづまくや初秋の
りのまよもとで宣りの夜し又
秋風ひひうあうれ歎され
弓石れよとよきんやんぢ
モツカニ秋
二弓びよと相手をうるわす在
まよとよきんやれ歎され
弓石れよとよきんやれ歎され
ちよと雪うるはく候くや二叶あ

富山

秋色

千波河の戸ねやえれ魂をも 虚櫻
 の鐘乃とむる音くや深きとす
 一番やれ川下りれ下り又 蘆鶴
 黒波うねひをそそぐ風ひうね
 放船うちやまく圓波舟休り 桑水
 乃る名乃浦や声のまばたけ
 忖りけ母毛や深まれふとく色 固色
 那づと不動の鐘乃浦うま
 窓れ行かずリ者一ソラびら

因サヌカム浦見よまくすすむから 不全
 繋ゆうしやじさざまんてあひ聲
 堀りうな浦をゆやくよの岸
 えのゆもぐれれねくタクシオ才
 猛丸の、子すら体へ 三曲の浦 嵐子
 ゆくよしのふた隠もすがくわ月寄
 脇まみれ四つやくはののまく雪
 お車やひ声竹ふるひふ葉符
 畏そ乃寄ふうすや川千弓

金金主

火燒赤土根子火燒之流之

卷之三

至れやれまほまほひら
吉郎夜のきよし方へきよの月
やくらんのちのびの前まほ山陰を
ゆくまほ山陰をゆくまほ山陰を

錦繡

和の匂ひ一萬からや初月の
風流のやうを身にまといて山中をあらわす 紫垣
一花碎くちりのやうの事
舞ふよおだつて腰や袖屏風
鳩の巣づくりねつけにとて落葉をかぶ
胡散なういふわざをうながす 小聲
十ぢゆやむるはれいり

も、省の事を強て主直

あ宣れまへや川あら月 琴松

其洞

佐保原のさんざんすむあれ森 花水
川のさくらんと日ちよし田山 青板
縞木や放トナリシハづまり 尺志
セ乃ナシホト風みにせく鳴ふうれ 枫女
木よしりや難題ては志利あし 水尺
玉のむや抱協妻せ波所 羽金
あぬ舞れゆもるーの月 春笑
引揚めにあめ此すやま竹山

上方かをくのせがはらすやるの声 蘭丈
 ハシモモ猪みまほむれ也レノナ桂 雪窓
 もうりやまとふ者れもひれと 千竿
 稲またや猶の浮氣なほひもひ 渔舟
 里中か月やほく青木北緑渡ア 富春
 暮らすありやどぐれんわ虫の声 觀色
 立ちまや歩在松碎くもひれと金十
 さくままれるをして侍やく内蘇 如行
 岩と山に眸清一うきはく 雪集
 あすれまや川あら月 琴松
 佐保原のさんまくまよ木ぬる水 丹水
 いのまくひ川と日ひよも田山 青椒
 繩まや放トハリヒキアツマリ 尺志
 セクタチ色と風みにせくわふれ 枫女
 そよしりや難難て志別あく 水尺
 まのむや抱抱も實せ波折 羽金
 おみ草れゆゆくもひくの月 春笑
 け拂ゆゆくもひくの月 春笑 其洞

生のあらへゆきもし辭ひ辭まく 窓
風中、ゆすすにまつて母の悲扇へ
抱ひぬやむしりあくよるる

團扇銘

虚丸

固く、なが法師、なまく住むして
まますま、まほせせまわしてまく、
思ひとみびと一まれ紙と音を筋書は
後ひと追尾の満くみびくもくと空縫は
まく、みびと紙と口を天玉障紙とせ

タ紙す紙もいあらん數すれ數すも
一翻の落風なりて一間のやまと追尾を
まほてと半帖と張將軍のよ照れ
哉のかくとものとくと内むれん姿で
ぬまえ難れ毛持たぬふの冠とくとも
くくすすいのふの財はりかようじん
くる外へとまく事いと半帖かくしん

あらめりとまく事いと半帖かくしん

百韻一折

紀之

日をひも柳の下に風を吹く
孫をひそめの木に上りて
風を吹きに柳の下に立まゆ
胡の原をもとめと長者町より
酒を飲み拂とくふかうりや
一歩も出づけりとおらうな
お合ひの勝負も聞ひての母の月
成花

古今集事記と云ふ也 可計
此中も物も力折のうるゝ也 洞秋
序 ハラシトマツル那波 富山
塔サレリテテ凌霄れむしもれ 不全
タヌのホシアリムシルヒルヒ 富春
タヌ会比火モモ塔アリタハル 動荷
タニタクタクねの役よ姫ハル 虚操
ニ味原れゑの切どすも役あく 桂舟
鳥ア写ミムニキアドマサル之乎

糸の雲の乳みをすくひの有の照
紫垣
茅堂の新竹をもとむる秋色
流の音をもとむる大河の海
岡邑
をきいだ獄の鼻めりとれり
琴松
風の全般よもぐじゆのも
嵐子
西や月もとてんれいれ早の原
蘭水

飛驥

高山

笠翁

と涙のよ叶へ船のあ

布龍

照津れを洋へて舟ふ桂ノれ

書葉やさのよひ船り今りよきよ

船まやねね船乃和今もよろお

日陰の百合とせせりゆく

佑母さぬれぬりよきよのす

すきよのすきよのすきよのす

布龍

あめづはくわくのまへ風

郭 もへ強夜とらかき風

かみはゆんもく通ひそくふふ 布

きくは戸ひーての底とくすす直

如由

肉をとあひておれ牡丹うな

おうはやのほひ人年日照りま

如錐

むとりあれおとちあくや室の梅

まのまの枝まごとくの底乃塔

吟之

人向ひ回一旅よりたむせられ

耳をくぬのよどかやや寒く猿

因寄りも虚れ因まや難在し 古拙

愁のまぐりぬれもむか愁のむ 未考

辻風も口を興じる柳、つま

もくじとれやまぐりの柳、れ 東水

もよくじ柳も風とがくじや

十三葉
素女

お代つやいこしむれあうとく 貴山
アカ和およびとくに因れ篠、未深

美免音、うきのゆきとくよ一葉あつみ

伊勢

鎌鎌五

四日市

無外坊
燕說

祖シロふねの川シマツも梅のシロ川シマツ也
学シマツれど門シマツもや極シマツり小シマツもくも
多シマツい鳥シマツり近シマツにシマツもシマツかが
片シマツ神シマツ山シマツ校シマツよシマツとシマツ鶴シマツる
白シマツきシマツ少シマツ修シマツく漏シマツきシマツにシマツり
名シマツ自シマツやシマツり布シマツよシマツ山シマツのシマツ絹シマツやシマツ山シマツにシマツり
先シマツ絵シマツの刺シマツ者シマツよシマツちやシマツ山シマツにシマツり

相シマツ体シマツよシマツねとシマツナリシマツよシマツ紅シマツ葉シマツあシマツる
壁シマツ人シマツはシマツとシマツうシマツてシマツアシマツとシマツやシマツ岸シマツをシマツ
小シマツ役シマツとシマツあシマツくシマツさシマツうシマツやシマツ宮シマツ佛シマツ
戰シマツのシマツ身シマツもシマツあシマツたシマツ身シマツでシマツ身シマツ身シマツにシマツ
幸シマツ被シマツれシマツゆシマツくシマツそシマツてシマツゆシマツこシマツきシマツ
天シマツ子シマツふシマツくシマツや組シマツのシマツをシマツらシマツくシマツ
櫻シマツと消シマツて殿シマツのシマツはシマツよシマツすシマツうシマツ
片シマツ舟シマツや蟲シマツ花シマツのシマツ唐シマツ橋シマツれ櫻シマツばシマツ

三蘋亭
鳴之

客ももゆくもゆくもゆくもゆくもゆく
草木やたり乃晴すの宵すとい
味曾もまれびじてひやかね松花のま
散うしてぢりやふせん棚か城
梅のやまと葉の笠は衣れ細縮絹
通ゆよ草の解も土とくしら
いふゑれ扇扇よ拂ふせ歌うる
名風よ風のゆきとくに隠うる
泥地乃卵ゆきあそぶ野

指天齋周行

鶴ひやあげ立山の世界を訪
すくすくもとまんて妻や小月
乾のむれ脇坐すくや菊の若
聲を聲とほきまといゆう
初、嘗たる狼狽の事よりりくら
夫もれりももまやまち五
岩上觀
村高

古ゆくも深山とやわノ肉
算やも在玉刀をうちて死む
郭スロトハシタリキ

之日自れ蓋目て知るや、まのを
絆もとて深きを知り乳を歎めむ
月の脇にせよしらばせ 畏
あくまの一往後やう胡のれ
佐理乃まご温良さをもんが
乾穀や海とまこと本竹より
うじゆ中とて目打ゆまご法中並一川
ワツチの名をもんがひ風もあり
吹響よりてふる風乃柳之船

子すすまよつて周ひも鶴うな
三そむれにの庭あじや室の室
西をりうして年や海の月
水引のとわげらせてみ海棠
川めぐりへと日暮れゆき
生風扇縫もくはくと五百生
洋頬梨子移ふやせたりぬの雪
移すとよもや南蠻の花瘡治

洋頬梨子移入中性大り如の事
萬葉集卷之南蠻叶生瘡治

十天泉

ゆりゆ乃康ゆるひや夏のに 回月
大刀もじやくすをもやめん人ま
まを海よな原のむや里乃敷
鉢ゆり並んで坐や日向村
封下と網りよ切み松枝くれ
西壁れ蘿や風よさんばく
きの菊の塔がくまを坐すら
水色の活潑をうけてアリリ
あはと殺そどうう木のせき山 丁濤

天秤の計とくやくや第四首 候和
梢うしゆるやぼくく生輝相
寫され、生々やねのすりらみ
ほ葉ノれ風のちまくれか城 桂可
くらまくらや掛毛のこそ端いふ
木兔の思ひ立たぬさざれ柳うみ
ゆの乃木ゆかゆやちよ宏山 仙叟
塙少や尾れあくはせばすづら

新法師のすゝく煙／＼写山翁 鹿六
小翁と引やハ弓を用のトモ
シテやありとのゆふ音をり
歌をやぬ乃ぢう鷺もと鷺 里東
抜雲やお放きしとみくと
は荷やアヒト一族の程大トモ
一戸もこつばがらの郭一云
そほの深きルをやあひぐら 都芳
脂自やんの都と記せし

萬葉集卷之二
里川
过風吹りどりよが乃蘇うる
水仙や豆子をてま車行多度
一ノ木ノ系をゆくや松の木れ
ゆき豆子や豆子をゆく方晴
十ノ木れ木豆子名あら木の森
ひづくや豆子半いり一れり
豆子豆子豆子豆子豆子豆子豆子
和朝

我り声より梯りて、重ねて左林
疎散もややまの荒野れ音

豹鹿山歌

かづらきをさとひて下りや

鳥川客 玉之

留別

家とよみくと序ふ水鶴ノれ
獨りおて極よおきゆの福の名
留め紙役者れ化粧仕事

北野

角松ノリをじきてアモミの月 牛角
アモミとれアモミとれ流やがひむち 可笑
底風乃松ノリをアモミとれ 女流之
アモミとれアモミのアモミとれを 其葉

来名

中席と千日や敷の赤にん 指三

南天の室や赤くいきなれ声

窮りあく一川家まへし室のうち

百日紅辯

指三

粵は方日紅とつる本子吸やむむちの
日御に教へる也と又貴重ひくもたまき
政ノも似と唯益々ひきよめす年
ノリモ此日そらにてゆかひくもす
游く者々ゆいゆく漏と騎もむへまつて
ちよ一度ハタタケシカジガカムリセの
ミキムキトドカニテウツカニヒトクニテ
モハ望強とどりん一叶かみの

人朝紙物もあまくの事と
心別離をのむことと二点と空てを答
成佛れぬもむかわば

山田

予の名下へ寄りてゆく
柳巴

一之瀬

赤葉を交へゆき延後すをうむ
拳石

慥柄

古ノモドクニ風中吹吸アシテ

三社

石搏

達ニシテ御子おおきに其子を名稱、うぬ
波點のうしにちやまゆ内瓶翁
水底に浮ト、望み也月刃舟
いぶくすに猪の香炉や屋古壁

菰野

湖松堂

八あらはるるとむすびさう九里子

ノ肉と照局、れふゑふれ
ノ中のむや森ほ亮叶からし里 浚泉
香公侍のよひとが病や當乃園
非見も恥と乃くゆけ二十、其公
裸身にして泥湯やア羽の雪
貝うつふ姫を畫川めり千波 矢石
若竹や仲すれ度よ香葱うね
我僅れ隠へおやせのむ 水考
乃シムノ此乃にばくに事半ば極ム

西とすく後よりきりやうし年 己巳

いとゆべれゆくもや小木原 札白

戰乃居のとくね候也大狼引

御ひく風れ事ゆく轟、つ耶

轟車 み

みゆくゆや因とくひ五位の声

出代アヤ剣深乃梅とあてり

出川とよじやと声れはくと

枝遊堂
三重子

振きりゆゑ音とやくめ鳴の声

伴吹く雪が死るや長尾尾張

覗解

私水

凡そあらかじめ此にてせう言ひてゐる
唐才人和もうじまく人參ハ鶴鱗又
功もく肉桂を東京と上ふてんがくふの
至海扇ハ薩摩の流よりざう師ハ丹波よ
ゆくとく志列の抱章を始まれ人のよ
むるあたりは銀アラモトササキシマ
勢多さぬでて海中船弁よりてわざわざ

まつりおらども小まく小木原

吸あとほんらゆまひ奉る小兵をこも
早業れども傷あわてゝ又やうせ
一人の死もいたゞかずの爲
脛きりうちおは血氣れよと百益れども大
丈夫でりをかづかへりか原をのぞみたる
かとおゆきとくとおゆきとくとく
まゆく見あへりやとくとくとく
辛いゆきとくとくとくとくとくとく
故にあら塵埃のよすがと睡ふとす

不幸のやれ不幸といふも又云也
多ふもとせんとくとくとくとくとくとくとく

連修と消へて赤脚渴 私水
船たぐやしきはまへよ行の音
以上きて階下おしやるあひ
はもうと重いゆりや、ゆのま
年九月配つと立じやう朝のむ
七月や三の階下を弱はせ

私水

八極乃ニ通すひもや渉合下構
初官事と古地よりうなづけよしら

三河

鳳來寺

飾らじらゆ因能才ふる玉をと

如捨舍
儲齡

初翁や世男のゆれくちのそぞり

尼江葉其とよよまでくら筋やお

後章と解きく安され程ノ

蓋あれとくちがひにとぬもんや
さむくの處のゆきせ壁の纹
研雲や、まもうちりとセ変化
疾延乃ゑ脳筋れわくほれん
泥ゑ密れ役のり者やちるれん
掛毛乃縫ハキリカツシテ生門
のれらともふ合はれや年のも

美之幸よ清きれ比川中波を

名物用意て身に着く那

金全一
五言絶句

玉蝶のじうへむかひ年ひ及
徳翁
泣語りし御と坐りてひすうめ 琴月
坐てお詫帽るやかきはく
せのれりわのむとアノアノ 拝家
ハシモ様セシモトモアレクウヌ
小すはうご百乃眉あつむねりくれ
けのすゑなるまとがもとせりくれ
桂木もみの木のむらー奥之院

亡人桃里

桂木もみの木のむらー奥之院

笑むれむりうげに門墨栗せよ
佛ゆもあずむくあり達のうた
古儀入扇ふく角力せんとく
合手序と一弓ノケミムヒテ度

さうにきて年中の持てぐの宴 何虹

蓮池よりすくい水雷しや華の首

はせても牛しあつて筆ひづみ

湯の糸の小波もまく一出たさ

一川家も候の室居や難事い鬼空

煙拂ひ日や例年 乃扇持 鬼空

猿猿の腕よ壁うりにの 爪

天桃園

其葉

ぬきうれのつねむれう夙志と氣柳

多き月の比三別白雲子方まづけは

強ふぬ不二の白雲を拂ひうち

雪鳥の一盆燈を拂ひうち

室の下ゆ枝を拂ひほの月

さく玉のゆく皮切せまづ

歌仙首尾

鼻詠乃拂ひまづうるづうの月

儲齡

千代アラシマサセ狗牽 何虹

色ゆきじゆきまくはうせむとよだに 鬼伏

往うきうらゆの旅せぬあと 甚葉

祖朴のすうとま衣よ股うそとゆ 柳家

室ううきくはくと身拂ひそめの月

赤

立きくもくや拂ひそめの月

ほほ拂ひそめの月

赤

毛根あつてに別と比丘尼の衣衣
首のゆくわくは解家

ナリとあらわくは近う書

約半世紀、年を失ひ

虹

田原

力増ふとまきの山

桃鯉

升の宿

遠江

水久保

ほのかの花聲中に温純ぬるさり

斜川

よしり一きよみくはくよひに筆

船浦れぞゝも煙一社も

直樹よき音や音れ大羽ば

たゞくよくて肩の相の輿、つま

若鈴の尾てすゞよきやばの木
石移うむとしがおとくじゆ仙衣

内伊レリヨシハ後ニシテシテシテ斜川

六時ヲ切シテ種ハキシテモリ。支人白駒

新屋トシナカ原トシナカ月

酒瓶リ古ゆれ新や夏のむ洞巴

白翁リ孤松リシテ月室吉郎ニ

至一て閑遊トナシ

略々自代傳よどが日暮草花庵

信濃

寶川

乾草トシノ上とアセシテ風中

含龍生
棟宇

タクナシトシテシテシテモリ。支人白駒

人の子れよるよううよの浦、うみ

葉舟やもとを船おこり大久

月引く御の御よめ舟、れ

梅詞

里草トシテ新宿シテテヤ高原

以屋乃シテ糊引く處、うま 古町

をゑど重よ筆事とゆぢやリ生ふる 古町

梅う香れすとひたゞみを簾に 加流

旅 手

居士

一ノ段うりやもうのまのれ
風雅うへばくもむかく 加流

あらの小町れすやあく柱カキツヅタ 加紅
ゆく経れそり用や劇カキツヅタ すま

木の鳥とゆよき花袖アラシ うぬ 五梅

附合

あでゆく木の筆事と筆事

機織りと縫ぎともむ程の筆事

ゆくがほくゆくらむなす筆事 みゆ
馬もるばとゆく筆事 みゆ

川あとすよ一いじれ縮スル て

あこぐれすよ神 みゆ

福島

約束せらむすい間や来るのも 湖唇
日の下とも山の緋へちじきり
うりうりがまくらひすまつみ

附合

田子権よおもてあらざるの月
吹きうとうござりてもうまのむ
うららとゆくとくを兼ねぬとせよ 仙居

えれやのぬくとくに繁像 秀陽
の野れ蛇モスクとも安一 糸井
利根に描くとくに極夢み
ぬけぬるまくのまや小由け而

附合

峰りうとうとく雅の感絶声
ふのさくびりに寝うくよ

入定の御庵上ごりて花はなた 秀陽

富之腰

百叶比佐や詠味等のヒカ城 松秀
あやめのすみは東へとらむ雪の風
地紙アリ音ふりきくや白牡丹
紫陽花めぐるばよしらゆる花ミ
かさごくやさざれ下りてまよ風セイ里雀
セイ南

藪原

弱もしくいさむる上の眠づゝれ 未考

有王よくやうの餘年おひす
新法師と捐よせらしくてゆうが 壺珀
事の乃ぬや詠味等のワセキ』 一湖

出羽

米澤

宝解やくすく抱ふて三軒庄
しきの家ぬらげと小猪うわ
吹きくわせとまよ風れすれ 丹流

和光岑
觀山

斧 宅 在 は 一 箕 又 か と く ら 月 流

車 仰 や 事 ま ト ム 你 雪 の 御 虎 阳

猿 の あ い 桂 の 嘴 に き く さ く し

寒 雨 や 扇 わ ぐ ま ま 着 眠

初 年 や 飄 く ふ そ え こ も 免 興

の い ま れ 骨 と の で て う な く な

は 水 つ み は と と け 人の ば 芥 舟

ひ づ く よ し と け く う お ひ だ え

と と ほ く 篓 つ や 梅 の 旗 方 梅 論

空 す し い く は い じ う き う し て 吾 舟

将 人 れ ま さ し と て り や 莺 梅 柳 渡

お ね 乃 口 も そ そ う 朝 千 重 桥 輪

吉 月 よ 風 お か い し ん か す ま 柳 蝶

時 す れ や 薫 店 す ず も 蝶 貝 松 亭

ひ づ く は 一 时 令 や 事 一 の 晴 伐 打

ひ づ く は 一 木 令 や 事 一 の 晴 伐 打

ト ト 木 の 令 や 事 一 の 晴 伐 打

雨十齋 柳舟

猿 と い ふ や 佛 せ わ い う 月

雪の事あやしむより一人我者 柳舟

楓樹窓

蟹の日おもむくすくよきの月 月夕

うり雪やくちうとす筆の音
多々をやまとすふ日の梅のくふ
牛の乳がゆうとうり筆の音 柳徑
鬼の木の脚代と醉みふ笔、うね
參符乃神や木の葉とまくいまと
あそびく相乃前日を筆たち

き梅うりたうじやむれうつる 蘭舟

初冬や雀乃うりうてのう
うりさせうと木の牡丹、うね 用和
桺むりよまくる鳥や山 楊 振甫

ぎくうりあやがり止まるや清水
いざおもひやの付字とほの月

桺うれめりよまくる鳥や

うりにまくる鳥や清水

碎てまくらすもたまうや赤桂 柳城

原古柳枝曲
原古柳枝曲
水仙文隣
長山柳枝
湖介
螺山
水哉
知多
雅羅琴
梅友
柳英
沿風
紅夕
挑里仙淮
自黑
柳曲

金鑑五
原古柳枝曲
原古柳枝曲
水仙文隣
長山柳枝
湖介
螺山
水哉
知多
雅羅琴
梅友
柳英
沿風
紅夕
挑里仙淮
自黑
柳曲

りよれ候とまくやまの候 東也
宮のあらわの漆乃辻志^{コロヒ} 白梅
引波のゆきさと柳^{シロハゼ} 柳虹
頬赤てアラアリ紅葉^{アラカツバ} 点丸 知行



京都書林

六条花屋町新町西^エ入

清四郎開板

